

子どもの発達と家族関係に関する縦断的研究(3)

- 子どもの精神的健康と自己評価との関連 -

○ 眞 榮 城 和 美 ・ 菅 原 ますみ ・ 酒 井 厚
(白百合女子大学大学院) (お茶の水女子大学) (山梨大学)

《目的》

本研究は、子どもの精神的健康に自己評価が果たしている機能について検討することを目的としている。今回は特に、1) 児童期の自己評価と思春期の抑うつ感との関連、および 2) 児童期の抑うつ感と思春期の自己評価との関連に焦点をあてた縦断的検討を行うこととした。

《方法》

対象者

1984年8月に神奈川県K市市立病院産婦人科で対象児を出産した家族について開始された縦断的研究(Kitamura, Sugawara, Sugawara, Toda, & Shima, 1996; 菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井, 1999)に登録されている被験者のうち、出産後11年目の追跡調査に応じた313世帯。また、2000年の出産後15年目の追跡調査に応じた277世帯であった。なお、本研究における質問紙分析対象児は、児童期が329名(男子148名, 女子171名)平均年齢10.52歳, 思春期は270名(男子131名, 女子137名)平均年齢13.70歳であった。

調査内容

〈自己評価測定尺度〉

- 児童期版- 1996年の調査では、Harter(1985)のSelf-Perception Profile for childrenを翻訳して使用した。本尺度は“学業能力評価:6項目”“運動能力評価:6項目”“容姿評価:6項目”“友人関係評価:6項目”“品行評価:6項目”の5側面と、“自己受容感:6項目”を含めた6側面、合計36項目から構成されている。下位尺度の構造については因子分析(斜交回転・オブリミン法)を行った結果、“学業能力評価:5項目”“運動能力評価:5項目”“容姿評価:5項目”“友人関係評価:4項目”の4因子と“自己受容感:6項目”の計25項目で構成されることとなった。

- 思春期版- 2000年の調査では、Self-Perception Profile for Adolescents(Harter, 1988)の日本語翻訳版(古澤, 1996, 稲葉, 1998)を使用した。下位尺度の構造については因子分析(斜交回転・オブリミン法)を行った結果、“学業能力評価:5項目”“運動能力評価:5項目”“容姿評価:5項目”“友人関係評価:5項目”の4因子と“自己受容感:5項目”の計25項目で構成されることとなった。回答方法は「はい」「少しはい」「少しいいえ」「いいえ」の4段階で施行し、各項目で評価の高い反応から4, 3, 2, 1点と得点化した。

〈精神的健康測定尺度〉

- 抑うつ感尺度- 子どもの精神的健康を測定する指標の1つとして、Birlson(1981)の子ども用の抑うつ傾向尺度を使用した。各項目は、“とてもよくねむれる(逆転項目)”, “泣きたいような気がする”, “逃げ出したいような気がする”に代表される18項目であり、1: そんなことはない, 2: ときどきそうだ, 3: いつもそうだ, の3件法により回答を求めた。各項目の α 係数は.82と十分な値であり、以降の解析では全項目の合計得点を「抑うつ傾向」得点とした。

《結果と考察》

1) 子どもの自己評価と抑うつ感の平均得点

	1996年平均値(SD)	2000年平均値(SD)
学業能力	15.81(4.18)	12.18(3.73)
運動能力	12.78(3.77)	12.16(4.68)
容姿	13.66(4.11)	10.84(4.00)
友人関係	11.41(2.52)	13.75(4.22)
自己受容感	16.90(3.91)	12.98(4.20)
抑うつ感	25.41(4.56)	28.27(5.92)

2) 児童期の自己評価と思春期の抑うつ感との関連

1996年の自己評価と2000年の抑うつ感との関連を検討するため、1996年の抑うつ感を制御変数として偏相関分析を行った。その結果、1996年の学業能力評価、自己受容感、友人関係評価と2000年の抑うつ感との間に負の低い相関が認められた(Table2参照)。このように、児童期の学業能力や友人関係における自己評価が高く、自己受容感も高いと思春期の抑うつ感が低くなるものと考えられる。

Table2 1996年の自己評価と2000年の抑うつ感との関連

1996年自己評価	2000年の抑うつ感
学業	-.17*
運動	-.07
容姿	-.06
友人	-.25**
自己受容	-.18*

制御変数=1996年の抑うつ感
**p<.01, *p<.05 n=196

3) 児童期の抑うつ感と思春期の自己評価との関連

1996年の抑うつ感と2000年の自己評価との関連を検討するため、1996年の自己評価の各側面を制御変数として偏相関分析を行った。その結果、1996年の抑うつ感と2000年の容姿評価、自己受容感、友人関係評価との間に負の低い相関が認められた(Table3参照)。このように、児童期の抑うつ感が思春期の容姿評価や友人関係評価、さらには自己受容感の低下に影響を及ぼすものと考えられる。

Table3 1996年の抑うつ感と2000年の自己評価との関連

2000年自己評価	1996年の抑うつ感
学業	-.10
運動	-.04
容姿	-.17**
友人	-.31**
自己受容	-.16*

制御変数=1996年の自己評価の各側面
**p<.01, *p<.05 n=230

《今後の課題》今回は子どもの精神的健康度の指標として「抑うつ感」のみを取り上げたが、今後は「家族との関係性」や「学校適応感」なども取り入れた検討を行っていく予定である。

Kazumi Maeshiro, Masumi Sugawara, Atsushi Sakai